医の杜から巣立つ未来のドクターたち。
まっすぐな視線。彼には夢がある。

仁の道、仁の人へ

To Future Doctors 01



息子

REO MATSUSHIMA

松島怜央さん

川崎医科大学附属高等学校1年。
松島家3人兄弟の三男。



父と

YOSHIYUKI MATSUSHIMA

松島慶幸さん

医療法人・松島クリニック院長。
日本内科学会、日本腎臓学会、
日本透析医学会認定医。

これほどまでに親身になって接してくれる学校はなかった。

「私の父が、この地で産婦人科の病院を開業したのが昭和三十二年。私も物心ついた頃には、『自分は将来、医師になるんだ』と思っていました。ほかの道は全く考えなかったですね」と語る慶幸さん。現在、北九州市で一般内科、腎臓病治療、人工透析等を行う医療法人『松島クリニック』の院長を務めている。

三男の怜央くんは一七歳。父・慶幸さんが学んだ川崎医科大学附属高等学校の二年生だ。祖父と父が歩んだ医師への道を目指して、現在、倉敷の地で学びの日々を送っている。

「中学三年の秋に、父と二人で学校説明会に行ったんです。校内の印象ですか？　もう自然がいっぱいでビックリしました。ゴミゴミした北九州とは全然違うなあって…。寮生活の不安も、先生や先輩方の話を聞いたら期待のほうが大きくなりました」と怜央くん。

その言葉を聞いた慶幸さん、静かに笑みを浮かべながら…「怜央には二人の兄がいます。だから私もいろいろな学校を見てきました。怜央が入学して改めて思うに、教育面、生活面…これほどまでに親身になって接してくれる学校はないということ。人間力を養う意味でも安心してお任せできます」。

一年間、当校で学び暮らした怜央くんは実感する。「この学校は、先生との距離が本当に近い。だからいつも受け止めてくれる」。最初は寂しい時もあったが、クラスメイトとの濃密な時間は中学校にはないものだった。

人の命をお預かりする。その重みと気概を息子に伝えたい。

「入学してすぐに『医師へのインタビュー』というカリキュラムがあって、僕は、消化器内科の四〇歳の医師と一対一で話すことになりました。もちろん質問内容は自分で考えたもの。『やりがいを感じる瞬間は？』とか、『今やっていることで楽しいことは？』など。父以外で現役の医師に話を聞くのは初めての体験でしたが、話し終えた後、『医師になりたい！なろう！』という思いがもっと強くなりました。それと同時に、『お父さんはどうやって医師になったんだろう？』って…医師としての父の存在が大きく感じられるようになりましたね」。

現在、慶幸さんが率いる『松島クリニック』には、週三回、五時間の人工透析を義務づけられた多くの患者さんが治療に訪れている。「人工透析の患者さんは、一生、私の所に治療に来られます。つまり、私は患者さんの命をお預かりしています。ひとりの医師として、怜央には、患者さんとしっかり信頼関係を築ける医師になってほしいと思っています」。

ひと言ひと言、噛みしめるように語る慶幸さんの横顔を、ずっと見つめ続ける怜央くん。まだまだ少年の面影が残るその視線の奥には、祖父と父譲りの静かなる意志が漂っていた。